

「先生がんばりや」とお年寄りが研修生に声をかける在宅ケア

WEB 聴講生 今村美都

いつもは PC 画面の向こうから WEB 聴講している授業へ初参戦。
花戸先生のお話を直接聞いたのは、本当に幸せなことだった。

「地域包括ケア」といわれるとなにやらかしこまってしまうけれども「地域まるごとケア」といわれるとぐっと身近に感じられる。専門職でも行政の人でもない、ただその地域に住んでいるだけの私にもまるごとケアの一員にならなれそうな気がしてくるではないか。

病院では白衣の医師を前に萎縮する患者さんでも、自宅で迎えれば自分が主人で、医師も客人。血圧を測るのに冷や汗をかく研修医に「先生、がんばりや」と声をかけるというエピソードに思わずニヤリ。

「悩みながら、考える。それが、お別れの時間」「お別れの時間を提供しているのが在宅医療」「病気があっても元気のほうを大きくすれば、相対的に病気は小さくなる」「待っていてもコミュニティはできない。積み重ねていくしかない」などなど、心にじわじわと効いてくる言葉の数々にほうっとため息が出る。

カルテをコピーして患者さんに渡し、お薬手帳をカルテとして活用というのにもびっくり。花戸先生のようなかかりつけ医、在宅医が地域ごとにいるのなら、ほとんどの人が迷わず在宅で人生を全うすることを選択するのではなかろうか。実際に地域の 40~50%の人々を在宅で看取っているというのにも衝撃を受けた。

これはもう永源寺に引っ越すしかない?! というわけにもいかないから、全国津々浦々、それぞれの地域のやり方で、「住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための地域まるごとケア」を実現していくしかないのだろう。
気負い過ぎず、一人ひとりができることを、一つひとつ着々と。